

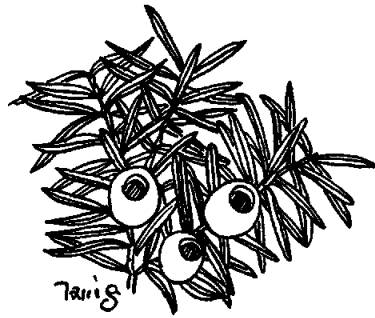
隆 棋

五月のなかばころ、すなわち、札幌のお花見のころに、みんなそろって円山へ登るのが、この数年間のわたくしたちの家族のならわしになった。何年か前になるが、お花見をするつもりで円山公園へでかけ、あまりの雑踏に驚いて、人ごみをさけて円山の登山道にはいつてみたのがはじまりである。

樹々の緑はまだ淡く、明るい林のなかであったが、林床はすでに完全な緑で、エゾエンゴサクやニリンソウをはじめとして、春の花がすでに満開だった。ところどころに、ユブシの白い花と、ヤマザ

クラの淡紅の花をみることでできた。なによりも、さわやかな空気とやわらかい土の感触が心地よかった。お花見のさわめきが、下のほうからかなりはつきりと風に乗ってきこえてくるが、このなかにはいると、それも特別に不愉快には感じない。家族づれや中学生のグループに出あう。ときどきは、若い二人づれが手をつないで降りてきたりする。子供たちもすっかりご満悦で「なぜこんないところにも、皆こないのかしら」といったりしていた。

ゆつくりと頂上まで登った。幼ない子供にはかなりきつかったと



ひとつの提案

みえ、最後の登りはおぼつて登ったように思う。頂上には、思ったよりもたくさんの方がいた。汗をふきながら、札幌や石狩のほうをながめると、大変に良い気持である。特別に話し合うこともないが、みんな仲間のような感じがするのが妙である。

このときをきっかけに、毎年、みんなで円山に登るようになったのである。わたくし自身は札幌生まれなので、円山や藻岩山は子供のときからなつかしい山である。林学を学ぶようになって、館脇先生から円山と藻岩山原始林の植物学上の意味を教わり、さらに、林業の研究を自分の仕事とするようになって、円山、藻岩山の価値を確認することができたように思っている。しかし、このときの円山は、わたくしたちにとって学術上の価値というよりは、そのことになんの知識もないひとりの市民としても、大切にしなければならぬ存在であった。

ところが、はなはだ残念なことがひとつある。毎年感ずることであるが、頂上附近がかなりよごれていることである。紙屑や空かんが相当に散乱している。ひとりやふたりの人数では、清掃できないほどの量である。これはひとり円山に限ったことではなく、風景地や観光地でもっとも普遍的な現象となっており、すでに多くの識者によってなげかれている。しかし、わたくしはひとりの識者として、同じことをここであらためて言おうとは思わない。思いつきにすぎないが、ひとつのささやかな具体的な提案をしたい。

それは自然保護協会の仕事のひとつとして、みんなで円山の頂上の清掃をしようかということである。時期は雪がとけてから、五月中の一日をまず選ぶ。年に二、三回でよい。できるだけ会員自身に参加する。会長、理事長など幹部の参加がもっとも希望しい。協会の名前で、小さなしやれた立札をたてる。マスコミの協力を求

める。

自然保護運動が、自然保護の高遠な理念を説き、個々の問題について意見書を発表し、また、陳情書を関係方面にだして圧力をかけることも必要であろうし、また大切であることはわたくしも否定しない。しかし、自然保護運動は、特定の識者の間のサロンのものにとどまっていたら発展はのぞめないのではなからうか。先覚者が、自覚のない者を啓蒙するというだけではだめだと思ふ。市民の運動となる必要がある。そのためには、識者がまず市民として行動することからはじめなければならないと思ふ。

自分の身のまわりのことから思いついた視野の狭さは知っているつもりだが、自然保護を自分の実感として感ずるのは、身のまわりのことから始まるのである。その意味で、もっとも身近なのはゴミの問題である。これは、自然の破壊というほどの大げさなことではなく、すぐに回復できることである。自然保護の思想を養うためには、まず、自然的環境をよごさないことから始めるべきだと思ふ。

二、三年前に同じく家族づれで、オコタンベ湖に行ったことがある。この比較的原始性を残している湖は、大変に魅力があつてみんな歓声をあげて喜んだが、ここでも足もとは無残であつた。「遠くをみていれば良い」というわたくしのことばに、子供たちはみんな笑いだすばかりだつた。家族づれのささやかな楽しみなので、いつも心に小さなしみがあるのは美しい自然のなかのゴミである。

札幌市民のほりである円山原始林を守るために、自然保護協会は市民として行動してはどうでしょうか。快適な早春の山の散歩をかねて。

(北海道大学農学部教授)